

[第3部] 象徴としてのカヌー

Indigenous boats on the rim and islands of the Pacific:
A prelude to the Out-of-Eurasia anthropological history

第13章

船の旅化粧



クラの財宝（南山大学人類学博物館のムアリ）

船の旅化粧

はじめに

天地の 初めの時ゆ 天の川 い向ひ居りて 一年に ふたたび逢はぬ 妻恋ひに 物思ふ人 天の
川 安の川原の あり通ふ 出の渡りに そほ舟の 鱸にも舳にも 舟装ひ ま楫しじ貫き 旗すす
き 本葉もそよに 秋風の 吹きくる宵に 天の川 白波しのぎ 落ちたぎつ 早瀬渡りて 若草
の 妻を巻かむと 大船の 思ひ頼みて 漕ぎ来らむ その夫の子が あらたまの 年の緒長く 思ひ
来し 恋尽すらむ 七月の 七日の宵は 我れも悲しも (10巻2089)

この万葉集の長歌は朱色の船の舳先と鱸に飾りを付けて、年に一度の逢瀬に向かう様を描いている。船に装飾を施すのは航海安全という目的だけではなく、船自体に相手のまなざしを意識させ、いわば化粧をすることである。同様に「……さしむかふ鹿島の崎にさ丹塗りの小船をまけて玉まきの小楳ししぬき」(9巻)など何カ所かに朱塗りの船という表現は出てくる。

民族学者の西村真次は『萬葉集の文化史的研究』(1928)の中で、船に言及した歌にふれ論じている。万葉集にはしばしば「大船の思ひたのみて」という表現があり、それは海で囲まれた国に住む人々が堅固な船への信頼の気持ちを表したものである。同様に琉球の『おもろさうし』、とくに13巻には船と大君の権威とが密接に結びついていた、あるいは大君の治世を大船にたとえて栄華を賛美する表現が頻出する。

海の民にとっての旅とは船に乗り海を越えることである。その目的に使われる船は外洋に長期的に出ることが多いので、旅用の船は構造的に複雑堅固で、また大型であることが多い。エンジン動力導入以前には、そのような船は風で運航することが一般的で帆を備えることが多かったであろう。

さらに沖縄の古謡『おもろさうし』13巻(967)にある次のような歌がある。

奥渡 舞う 鬼鷲／ つゝが上 使い／ 吾 守て／ 此の渡／ 渡しよわれ
(沖の海を舞う立派な鷲は、つつの上、せひの上を舞う神のお使いだ。我々を守ってこの海を渡したまえ) (外間 2000: 128)

鬼鷲とは立派な鷲、「つつ」とは船の帆柱、「せひ」とは帆をあげる滑車を意味する。帆柱は船霊を納める場所でもあり、船霊と鷲とが何らかの対応を持っていたことが窺われる。

オセアニアの航海師の間にしばしば見られる厳しい鳥食のタブーは鳥と人間との同一化に由来する(Feinberg 1988: 110-111)。帆柱に止まる鳥は行く手を教える導きの神であり、帆柱の先端に鳥のような装飾がなされるのはそのためである。同じ鳥の意匠でも異なった種類の装飾がみられる(図13-1: a & b)。

ミクロネシア・中央カロリン諸島は、今日まで伝統航海術が実用されてきた、地球上でもほぼ唯一の地域である。名誉ある航海士にとって鳥は重要だった。まず航海の決め手になるもっとも重要な星座は鳥の名前で呼ばれた。鳥は空を支配するだけではなく、アウトリガーを装着したカヌー自



図13-1 カロリン諸島の航海カヌー触先飾り a: 鳥型の触先飾り、b: 別形式の触先飾り
(ライブチヒ・グラッシー博物館)



図13-2 グアムのタモン湾に停泊するカロリン型航海カヌー
(右)と復元されたチャモロ型カヌー(左)

体も翼を広げた鳥に似ているし、航海士は自らを鳥に比定したとも思われる。航海カヌーは交易、とくに西方のヤップ帝国への朝貢のために使われた(図13-2の右)。

ポルワット島の航海師、マニー・シカウ氏によると、彼らの世界観では空の東には鳳が住むという。それは航海時、東の目印になるアルタイル星である。北緯8度付近に存在するポルワット島では、アルタイルはほぼ真東から昇る。東西に航海することが一般的なカロリン諸島方面では、真東と真西の指標となるアルタイルがもっとも重

要で、したがってそれが象徴する鳳座が天空を支配するという観念につながるわけである。

同様に多くの島で航海の目標になる星を鳥にたとえる。ポリネシア飛地のアヌタ島ではそれはシリウス、カノープスおよびプロキオンである。ヌクマヌ島ではシリウスをそのように認識していた。

さて実際に航海士は種々の鳥の生態を熟知する。すなわち鳥は種類によって陸から離れて飛ぶ距離が異なる。海で見る鳥の種類によって陸との距離が推測できるのである。また朝は陸から海、夕刻は海から陸に飛ぶ鳥ならば、時刻によって陸(島)の方角を示すからである。航海カヌーの触先にはしばしば航海士を導く海鳥が象られるのである(タクウやヌクマヌの古いタイプの航海カヌーの事例)。

航海術の宝庫カロリン諸島の航海カヌーは触先と艦はシャンティングを行うので区別がないが、船体の両端に海鳥を模した装飾が付けられる(図13-1)。海鳥は航海士が遠洋航海をするさいの重要な目印となる。鳥の種類によって陸から飛んでくる距離が異なるため、航海士は飛んできた鳥の種類で何キロ圏内に島があるかを知る。また朝なら飛んできた方向、夕方なら飛んでいく方向に島があると推測するのである。ただし海で寝るカツオドリだけは追ってはいけないと語られる。

また全体の形状が海鳥の頭のような形をした装飾がカロリン諸島の航海カヌーには共通に見られ

る。ただし鳥の頭は二股になり、正面から見ると角ないし触覚のように見える。長い航海を終えると鳥の目を休ませるために、航海士たちはこの飾りにパンダナス葉製の覆いをかける（図13-1: b）。

もう一つはU字型の枠の中にしばしば鳥の彫刻が配置されているような型式である。こちらの型式は新型といわれる。なお舳先・艫の装飾とは別に、海岸に停泊するカヌーの姿は、それ自体が渚に舞い降りた鳥を模しているのではないかと推測される（後藤 2011b）（図13-2）。

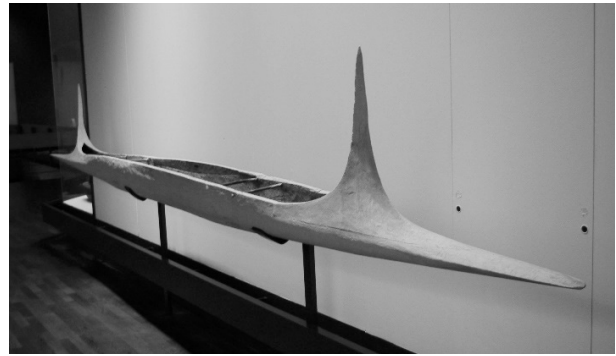


図13-3 マティ諸島のカヌー（ベルリン民族学博物館）

ミクロネシアとニューギニアの境の辺境、ポリネシアの飛び地（アウトライアー）とされるマティ（Matty）諸島では全体が白く塗られ、舳先と艫の手前に尖った装飾を持つカヌーが知られている（Haddon 1937: Figure 109）。筆者はこの姿に魚のカジキを想起する。すなわち尖った舳先が嘴、突起が背びれに見えるからである（図13-3）。さらにミクロネシアのナウル島のカヌーは舳先と艫の上にイルカの鰭を思わせるカーブした突起がついている（Hornell 1936a: Figure 254）。

さて本章および次章では旅や戦闘に使われる船が装飾される度合いが高いことに注目する。それは異文化集団に自分たちを確認させるあるいは誇示する意図があったと思われる（後藤 2011b, 2011c）。戦闘用の船であれば敵を威嚇する目的で船は装飾されたであろう。そのような旅用の船の「化粧」について以下、さらに南太平洋の民族事例でも有名なクラリングの事例に即して見ていきたい。

1. クラカヌーの旅化粧

1) クラ交易の舞台裏

近代的な人類学を確立したB. マリノフスキーの名と共に、パプア・ニューギニア東方海上、マッサム（Massim）地方の交易網クラ（Kula）はあまりにも有名である。この有名なクラについては数多くの書物や論文が書かれている（e.g. Leach and Leach 1983）。

クラはトロブリアンド、アムフレット、ダントルカストー諸島（ドブー語圏）、トゥベトウベやミシマ、ウッドラーク諸島などの広範囲にわたる慣習や言語の異なる部族社会を環とし、その圏内を時計回りに赤色の貝ビーズ首飾りソウラヴァ、逆方向に白色の貝製腕輪ムワリの2種類の装身具が贈り物として、リレーのバトンのように回り続けることを特徴とする。装身具は財物であり、また贈り物には石斧の刃などの貴重も加わる。これらは、長期間個人が持つ場合もあるが、基本的には1, 2年以上は保有せず、次の相手に送らねばならない。この地域では物を所有する者は他の人にそれを分配し共有することが期待されており、立派な贈り物を与えることで富者として有力者としての名声を得る。クラは男が行い、その社会的地位により相手の数は2人から100人以上と大きな偏差があるが、一度クラの仲間となると終生の関係は続く。

財宝はこちらから贈り物などを持って取りに行くものであって、先方が持ってくるのではない。だから逆に今回は、それに対応する財宝を求めて先方がやってくるのである。またこの際の贈り物はクラの財宝以外のもので、腕輪と首飾りは原則としてその価値を同時に比べて交換されるものではない（マリノフスキー 1980: 161）。

クラを論じたマリノフスキーの名著『西太平洋の遠洋航海者』（1980）は寺田和夫・増田義郎両氏の訳で紹介されたこともあり、日本の研究者にもよく知られている。しかしこの訳書は原著の抄訳である。この訳書は物質文化の記述がほとんど省略されているため、われわれはクラとは「非実用品」の儀礼的交換であるとの印象を持つ。しかし貝製品の儀礼的交換の背景には、数々の実用的な物品、食料、土器、木器などの交易があったのである（後藤 2002）。マリノフスキーは当初はクラ交換の実用的な側面を強調していたが、著作の段階では儀礼的な側面の記述に傾いていったようである（Norick 1976: 20）。また神話などから見ると、クラ交換は、異なった言語を持ち、敵対関係になりうる島々の恒常的なコミュニケーションを保つための役割があったと思われる（後藤 2002）。

また訳書を読んだだけでは湧いてくる、クラに関するいくつかの疑問については、原著を読むと解決されることはすでに論じたので（後藤 2002）、クラ交換に用いられるマワワ型カヌーを中心に以下、見ていこう。その前にクラの財宝について確認しておく（詳細は Campbell 2002 参照）。

2) クラの財宝

まず腕輪ムワリ (mwari) には10ほどのランクがあるが、その本体はイモ貝 (*Conus millepunctatus*) から作られる。紐や縁にも白いウミウサギ (*Ovula ovum*) 貝がつけられる。ここにつけられるウミウサギの数も等級に関係する。低級ムワリは1・2個、中級は2・3個、高級は4～6個である。さらにこのウミウサギの周辺には別の種類の小さなウミウサギ、西欧人から得たビーズ、あるいは botoboto と呼ばれる黒いバナナの種、などで作ったビーズ紐がつけられる (Campbell 1983: 231)。

マリノフスキーの滞在したトロブリアンド諸島のキリウィナ島北部の集団と沖に浮かぶカイレウラ (Kayleula) 島の人々の腕輪製作について原著では記述されている。それによると男がラグーンに潜ってイモ貝を採ったら、彼は妻の兄弟にあげなくてはならない。トロブリアンドは母系社会で、男は妻の兄弟に食糧供給などの義務を負う。妻の兄弟は返礼にヤムイモ、バナナ、ビンロウジの実、豚などを贈り、貝をもらった貝殻を加工する。

貝殻はまず円錐形の貝の先端と口元を打ち欠くような粗割りがなされる。この状態で男はクラの交易の時、南に行くパートナーであるアンフレット (Amphlett) 諸島に持っていき、クラ贈与の一部として残される。アンフレットの中心グマシラ (Gumasila) 村の男はそれを受けとって磨き、その状態で今度はクラの時ドブーに運ぶ。ドブーの男は穴を開けて種や貝ディスクで装飾をして完成させる。完成した後、クラのベルトコンベヤーに乗せられ循環が始まる (Malinowski 1922: 503)。

もう一方の財宝のヴァイグアないしヴァギはウミギク (*Spondylus*) 貝の赤いビーズを通したもので、首飾りとされる。そのサイズ、形態および色がヴァイグアの価値を決める (Campbell 1983: 234)。この首飾り用の貝ビーズはニューギニア本島のポート・モレスビー付近やクラリングの南東にあるロッセル島のようなクラリング外の地域に生産の中心があり、トロブリアンド諸島でも作られる貝ビーズは厳密にはクラの財宝用ではないとも書かれている (マリノフスキー 1980: 132)。

では首飾りは誰がどのようにして作るのか。キリウィナ島南部のシナケタ村 (ボヨワ島と独立した島のように呼ばれることもある) の村人はクラ交易のためにドブー島へ行くさい、色々な原材料や人工物を採集ないし交易で入手して帰る。たとえば途中のコヤ (Koya) では利器用の黒曜石、斧用の玄武岩や装飾のための赤い粘土、石器を磨く砂なども採取された。クラの航海はこのように、重要な材料を採集してくるという目的があるのである。

貝を採る場合には儀礼が必要である。モンスーンの終わる3～4月になると、シナケタ村民はカロマ呪術師にヴァイグアやその他の贈与をして、貝の豊漁を祈る。貝が採れると石片で貝を打ち欠

いて不必要な部分を取り、残った貝片を丸く整形する。そしてそれを円筒形の棒につけて表裏の表面を磨くと赤い層が出てくる。さらにそれに穴を開ける。この作業、研磨だけは女性、あとは男性の仕事である。カロマ貝のビーズをつないだものはサピサピ (sapi-sapi) と呼ばれる (Malinowski 1922: 370-371)。

筆者の調査地、南東ソロモン諸島のマライタ・ランガランガ・ラグーンでも類似の貝ビーズ製作が今日まで行われている (後藤 2020)。赤いビーズを通した紐はサフィ (safi) と呼ばれ、その状態でも流通する。しかしランガランガでは、貝の整形や穿孔は女性の仕事、研磨は男性の仕事と逆の分業形態になっている。聞き取りでも貝殻の潜水採集は男性の仕事、貝ビーズ製作は昔から女性の仕事であるという。

さてシナケタではディスクを使った飾り (kutadababile=大きなディスクの首飾り) は、貝を採る男とその妻の母系親族との関係維持のために使われる。妻の母系親族は彼にヤムイモを収穫時に持ってくるので、男はそれに返礼をしなくてはならない。つまり男は内陸の農耕地帯に住む親族やキリウィナ (同じ島の北部) に住む親族のため、あるいは友人や遠い親戚のために首飾りを作るのである。そして実際に貝ビーズを外部に流通するのはその親族の男であり貝を採った本人ではないことになる (Malinowski 1922: 372)。

3) クラカヌー

トロブリアンダ諸島民は幾種類かのシングル・アウトリガータイプのカヌー waga をもっていた。もっとも小型は丸木船に腕木を渡して浮き木を装着するもの (kewo'u) でラグーン内の運搬や移動に使われた (図13-4)。外洋の漁に出るためのカヌーには舷側板が装着され喫水を高くして使用された (kalipoulo)。このようなカヌーにオセアニア型ラテン帆に似た三角帆が掲げられる。トロブ

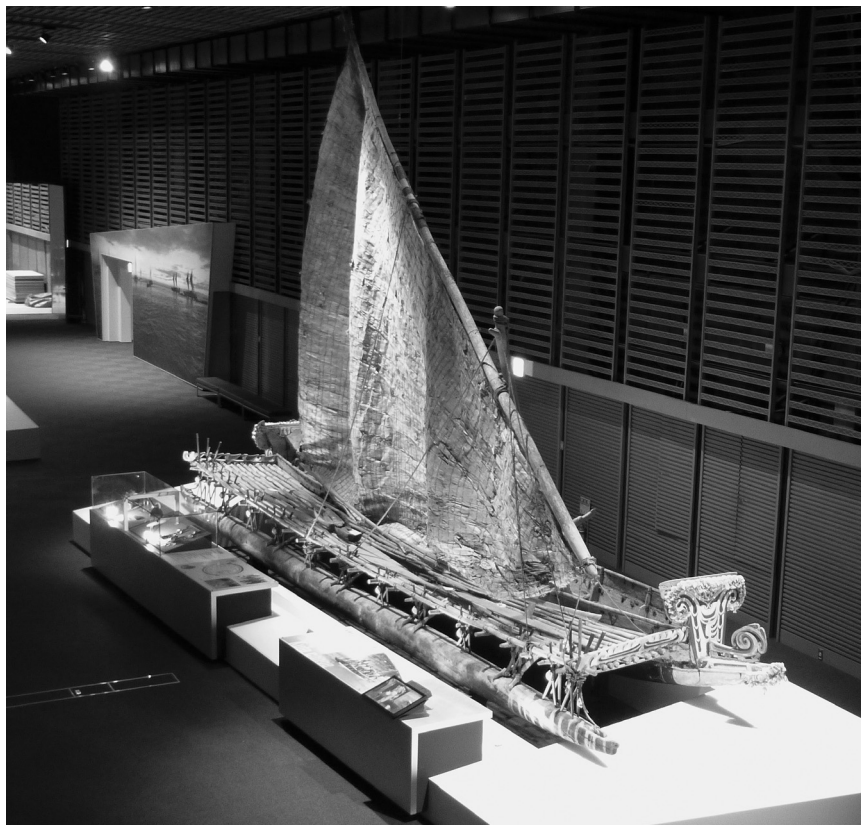


図13-4 海洋文化館蔵クラカヌー

リアンドのアウトリガーの特徴は船体よりやや短い太い浮き木を5～10本程度の腕木で支える点である。浮き木にはX字型のペグが挿入され、腕木を交差部に乗せるような構造、いわゆる下交差(undercross)になっている。このような構造上の特徴は今日でも漁撈用のカヌーに保持されている。

さらにクラ交換の航海に出るためのマサワ(masawa)型カヌーは、舷側を二枚以上鎧張りにつけ、さらに船体を横断する波よけ板lagim(splash board)と舳先に沿うように装着する舳先板tabuya(prowboard)を備える(Malinowski 1922: 108-112)(図13-5)。

カヌーで波よけ板が装着されるのはクラリング地域から交易網のあるヴィシアズ海峡からニューギニア島北東部の海岸やセピック川にかけてである。マッシュム地方、とくにトロブリアンド諸島周辺のそれは彫刻や色彩によって明確に区別できる(Hamson 2009)。

この地のクラカヌーの特徴は浮き木を風上側に置いて航行することである。したがって舳先と艫の区別はなくカヌーはどちらにでも航行可能である。たとえば北東にあるキタヴァに行くときは南西の風に乗って浮き木を右手にして向かう。逆に南のドブーの方に向かうには北西の風に乗って浮き木を左手に置いて向かう。

クラカヌーの装飾の中心は舳先板(prow board)と波よけ板(splashboard)である。トロブリアンドでは前者はtabuya、後者はlagimと呼ばれる。舳先材は突きでた舳先の上に、舳先に沿うように立てられる板である。波よけ板は舳先材の内側に舳先を横切って、進行方向についたてのように立てる板である。

舳先と艫は、機能的に区別はない。つまりそのとき船首になった側が舳先である。しかしそれとは別次元の区別がある。クラカヌーは基本的に首飾りを取りに南のドブー方面に行くか、腕輪を取りに東のキタヴァに行くかのどちらかである。彼らはドブーに向かうとき舳先になる側をdogdina、



図13-5 海洋文化館展示のクラカヌーの波よけ板と舳先板
a: Dogina lagim, b: Dogina tabuya, c: Uuna lagim, d: Uuna tabuya

キタヴァに向かうときの舳先側を *uuna* と区別する。そしてそれぞれに装着される舳先板と波よけ板の彫刻が異なるのである。たとえば舳先板は *uuna* の場合丸い螺旋の下部に穴ないし空隙が開けられているが (図13-5: d)、*dogina* の場合はそのような隙間は作られないことより明確に区別がつく (図13-5: b)。

また波よけ板は一見左右対称に見えるが、浮き木のある側の方の渦巻きが大きく作られている。たとえば図13-4の場合、進行方向の船体右に浮き木が配置される。したがってこの舳先材と波よけ板はキタヴァに向かう際の舳先側となりそれぞれ *digdina tabuya*、*uuna lagim* と呼ばれる (Campbell 2002: 73)。

つまり機能的に同型ということと、象徴的にあるいは社会的な意味として、カヌーの両端は区別され、混同されてはならないのである。

トロブリアン諸島の物質文化に見られる装飾、とくに彫刻と彩色は個性的な形式が多いメラネシアでも1つの際だった特徴を示す。その1つは渦巻き、あるいはメアングアの多用である。これは北東ニューギニアを中心に見られる曲線紋文化 (*curvilinear*) の伝統でもある。その起源については東南アジアの青銅器文化とくにドンソン文化に由来するという説や種々の動植物に由来するなど様々な説がある。

ニューギニアにおける人類学的調査の先駆者イギリスのハッドン (Haddon) は、この地におけるメアングアを鳥の頭を様式化したものだと考える (1894: 185-196; 1895: 181)。さらに鳥は単独で模様化されるだけでなくしばしば鱈と組み合わせられて様式化される (1894: 196-199; 1895: 57)。メアングアは鳥かどうかの判別は難しいとしても、マサワ型カヌーのアウトリガー部、腕木の最前面ないし最後面にはカツオドリなどの鳥が重要なモチーフであった。海を越えて飛ぶ鳥に素早い航海の願望を込めることは一般的である (後藤 2011b, 2011c)。

セリグマンはダントルカストー諸島から収集された舳先板 (*ragim*) の意味について考察している (Seligman 1909, 1946)。この地の舳先板はトロブリアン島の舳先板の下半分を切ったような形で、下部には舳先に挿入するための舌のような突起を持っている。舳先板上部に彫られるのは一体の人間、その下に背中合わせの螺旋模様とその間の渦巻きや波模様など基本的な文様構成は共通している。人間の下模様には胸とか腹のような体の部分を意味する語で表現される。そしてその人間は赤子と表現される場合もあるが、より具体的にはマッシム地方で著名な文化英雄マタカポタイアタイナ (*Matakapotaiataia*) であるとする。しかしこの解釈には疑問を呈する意見もある (Norick 1976: 143)。

カヌーは航海や漁撈のための実用品であるが、マサワ型カヌーのように豪華に装飾されクラのような儀礼的交換に使われるカヌーは、製作されること自体に象徴的な意味があった。その製造過程において様々な儀礼が伴うことはマリノフスキーが詳述している (Malinowski 1922: 124-145)。さらに富を誇示するために作られるヤムイモ小屋の製作とクラカヌーを製作することの象徴的意味の共通性と対比する意見もある (Pffernberger 2001)。

大林太良は『仮面と神話』(1998)の中で、仮面と特定の社会システム、とくに北米やメラネシアにおいては母系制および秘密結社が発達する社会に仮面が伴う傾向を指摘している (1998: 126)。ただし大林も認めるように母系社会と仮面が伴うのはおもに島嶼部であり、ニューギニア本島では父系社会にも仮面は見られる。逆に本稿の舞台トロブリアン諸島はメラネシア島嶼部の母系社会であるが仮面は見られない。しかし2019年9月の調査ではクラカヌーの波よけ板は仮面であると語る人物がいた。彼は波よけ板の装飾を基本的に顔の要素で解釈していた。たとえば波よけ板を形成する両側に関く螺旋は耳であり、その下の背中合わせのC字模様は目で、その下に鼻、ひげ、

口、あごと続くのである。その両側にあるU字状の模様は頬やそこに彫られた入れ墨を意味する。耳の上に彫られたメアンダーは波を意味し、波よけ板上部の模様はカモメ、その両側の曲線は蛇であるというのである。

4) 沖縄・海洋文化館のクラカヌー

トロブリアンド諸島は旧英領ニューギニアに属するが、大英博物館の他、オックスフォード大学のピットリバーズ博物館、ケンブリッジ大学民族学博物館などいくつかの博物館でトロブリアンド諸島産の波よけ板や舳先板が展示・収蔵されている(図13-6)。さらにカヌーそのものはニューギニア国立博物館に展示されているがこの資料には帆はついていない。ところが沖縄の海洋博公園内海洋文化館のクラカヌーはパングナス製の帆のついたきわめて希少価値の高い資料である(図13-4)。

このカヌーは1968年以前に作られたことが確実である。長さ約10m、名称はトイラムラ・グーヤウ(Toilamula Guyau)号である。その意味は「首長の死を悼む人々」である。キリウィナ島のヤルングワ(Yalungwa)村で作られる首長のカヌーは代々この名前が受け継がれている。このカヌーは赤、白、黒三色で彩色されているが赤はミルンベイから来る赤土、白は珊瑚を焼いてつくる石灰、黒はココ椰子の実(コプラ)を焼いて作った(牛山 1975: 12)。舳先板と波よけ板には蝶々と蛇が彫られている(図13-5)。蝶々は飛ぶようにカヌーが疾走するように、蛇は空飛ぶ魔女がカヌーに悪さをしないための魔除けである。さらに航海の指針として3人の人面像が波よけ上部にあるのは明けの明星を意味する精霊(守護神)である。アウトリガーの外面には海鳥の彫刻があり(図13-5:a)、船体の基部に当たる刳り貫き丸太にも彫刻が施されるのは首長のカヌーの特徴である。舷側板には明けの明星をデザインした星型が描かれている(牛山 1975: 15)。

このカヌーも前後同型だが舳先板と波よけ板の装飾は同じではない。このカヌーは現在、キタヴァ方面に走るように展示がなされている。それは帆柱の位置と舳先板の特徴からわかるはずである。

この海洋文化館のクラカヌーは1970年代初頭、キリウィナ島の首長ナルブタウ(Nalubutau)の所有カヌーであった(牛山 1975: 11-16)。彼は島で2番目に地位の高い首長である。このカヌーは同じ島のシナケタ村のクラ相手に貸し出されシナケタ村人が南方のドブーとクラを行ったときに用いられた。その模様は「すばらしい世界旅行」として名声を博した映像に登場している。そのときのトリワガ(クラ航海のリーダー)、首長トコバタリア(Tokovataria)の乗ったカヌー、いわば旗艦である(市岡 2005)。クラに出る首長同士はクラ航海のためにクラカヌーを貸し借りすることは珍しくない。

ナルブタウ自身もこのカヌーで東方のキタヴァへ数回クラ交換を行っている。それに乗っていた古老によると、クラ船団は舳先をキタヴァの海岸に突き刺すように接岸するのだという。そうすると舳先の装飾に相手方は魅惑されて、クラ交換に成功するのだという。背景に性的な表現も感じるのであるが、トイラムラ・グーヤウ号はとくに相手を魅了するカヌーであったと古老は懐かしんだ。

このあと、クラカヌーについては著作『Kula』(Malnic 1998)が書かれているが、それに登場するのが首長ナルブタ

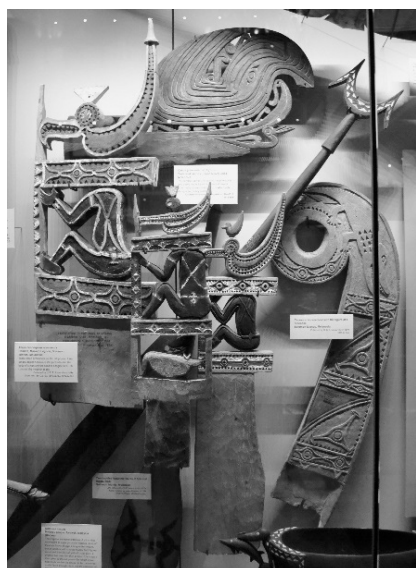


図13-6 オセアニアカヌーの舳先の装飾各種 [手前がソロモン諸島、後方上がトロブリアンド諸島、後方右がハーミット諸島] (オックスフォード・ピットリバーズ博物館)

ウの母方の甥であるジョン・カサイプロヴァ (John Kasaipwolova) 氏である。彼は今日首長にあたる人物で、首長に薫陶を受けた後、オーストラリアで教育を受けた人物である。カサイプロヴァ氏によると螺旋は近代的な線的 (リニア) の思考の対局であり、われわれの五感を総合するような認識のプロセスを意味する。クラカヌーの装飾に使われる螺旋は無限の生命を象徴するのであると言う。

カサイプロヴァ氏によると、1970年代日本にクラカヌーを送った後、映像を撮ることもあってもう一隻トイラムラ・グーヤウ号を1980年代に建造したが、撮影の後、野外に放置したため朽ち果ててしまった。自分は子供の頃、叔父のナルブタウがクラカヌーの装飾板を彫るときに直接その意味を伝授されていると言う。そして遠く沖縄で元祖トイラムラ・グーヤウ号が原型をとどめているのを知ったのは驚きと喜びであると語った。

2. 精霊の島ニューギニア周辺のカヌー

第2部では、カヌーを作るには多種多様な木材が使われているのを見た。しかし材質の選択にはこれら以外の、材質に対する価値付けや好み、そして象徴性や宗教観念も関わってくる。たとえば舳先は特定の木で作られなくてはならないかを追究する必要がある。

たとえばトロブリアンド諸島では木には精霊が宿ると考えられている。舟を作るために木を伐採することは木を殺すことに他ならない。そのために精霊に一時立ち退いてもらうための儀礼が欠かせないのである。将来、自分たちの命を託す船であればなおさらである。そして完成した舟には再び精霊あるいは「船霊」が宿ってもらうようにするのである。

このような観念と関連して本章ではカヌーの形態における象徴性について見ていきたい (後藤 2009b, 2011a)。とくに舳先は装飾がなされる割合がもっとも高い部分である。現実的に博物館におけるカヌー本体の展示はスペースに限りがあって難しい。その場合、舳先材がもっとも多く展示される部材となる (図13-6)。

1) ショーテン諸島

ニューギニア・セピック川周辺から北東海岸部では鰐のモチーフが舳先の装飾に多用される (Bühler 1961; Newton 1971; cf. Müller-Wismar 1912)。ニューギニア北東部、セピック川の沖に浮かぶショーテン (Schouten) 諸島のカヌーは舳先とともにアウトリガーの浮き木の先端も鰐のように加工される。さらにその鰐はカワウソをたべようとして銜えているが、その背景には因幡の白ウサギ型の神話がある。

この地のカヌーの民族資料は資料の宝庫ドイツや英国でも希少であるが、日本には2カ所、この地のカヌーが収蔵する施設がある。南山大学人類学博物館 (図13-7) および沖縄の海洋博公園海洋文化館 (図13-8) である。双方の資料とも舳先と艫に区別がないように思われる。この地の主要な民族誌はイアン・ホグビンの書いた『月経する男の島』(1970) であるが、その中でカヌーは前後同型でどちらにでも走ることができると書かれている。ちなみに「月経する男」とは、この地域で男性が大人としてイニシエーションを受けるときに、尿道の中にカニの爪や植物のとげを刺し入れて、母親から受け継いだ「女の血」を掻き出すことで一人前になる、これが男の月経である。

この島ではニューギニア本土と交易をするためのカヌーがとくに念入りに装飾されて作られる (Hogbin 1935; 図13-9)。たとえば舳先と艫には同型の鰐の彫刻が施されるのが一般的である (図13-7a & 13-8a)。ホグビン論文には舳先に鰐を彫刻する呪術師の写真が掲載されている (図13-9d)

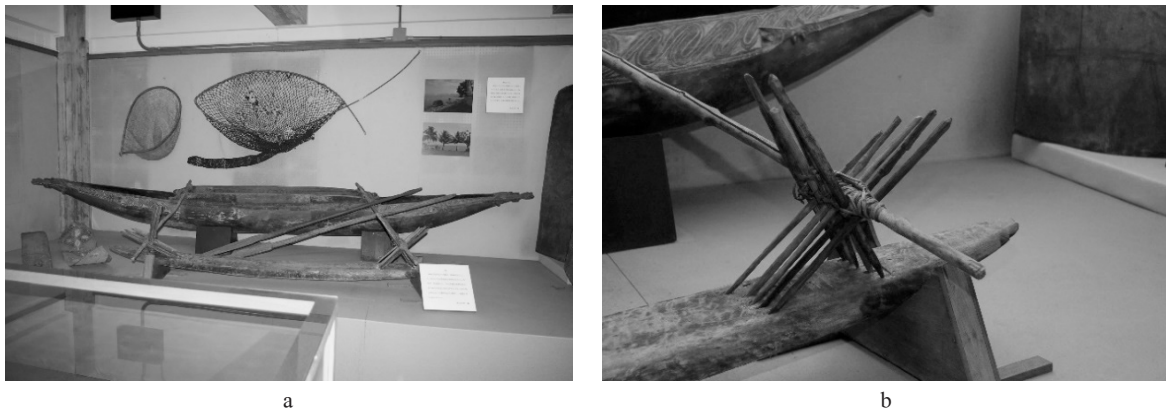


図13-7 南山大学人類学博物館カヌー a: 全形、b: 腕木と浮木の先端



図13-8 海洋文化館のショーテン諸島カヌー a: 全形、b: 浮木の先端

(Hogbin 1935: 384)。同様にアウトリガーの浮き木の両端にも鰐の模様が描かれることが多い (図13-7b & 13-8b)。南山の資料には鰐は描かれていないが、スキー状に薄く上湾曲した形態は全体としてデフォルメした鰐の形状を思わせる。

ホグビンによると、丸木を彫るのは若衆に任されている。丸木がおおむね彫り上がるとカヌーは火であぶられた後、塩水に漬けられ全体をこすられる。呪術的な効果があると思われるダンスと歌が披露される。次の段階は舳先と舳の彫刻を仕上げることであるが、この作業はベテランの長老にゆだねられる。長老はまた内部の最後の仕上げも行う。この作業の仕上げには精霊の夫婦の伝承に因んで、夫が妻に言った「目がきれいになるように、目が輝くように」という言葉が掛けられる。同時に彫刻についた煤がこすり取られる。これはカヌーが目的地までまっすぐ進むという願いが込められている (Hogbin 1935)。

両資料共に、アウトリガーの構造は数本のペグを用いた下交差 (under-cross) 式である (図13-9aも参照)。X字に組んだペグの上に腕木を固定するやりかたを下交差、X字交差の下に腕木を固定する方式を上交差 (upper-cross) と呼ぶが、サイズを反映して海洋博資料では腕木は3本、南山資料は2本である。また海洋博資料は腕木の上に荷物用のプラットフォームが設えられているが、南山資料の方はそれがなく、船体の上縁に外反する舷側板が装着される。両資料とも船体は上すぼみであり、腰を船体に入れて座るのは不可能であり、船体を跨いで、馬乗り状になって操船する形式になる (図13-9c)。これはニューギニア北東部からビスマルク諸島にかけてのカヌー船体の特徴である。ソロモンまで南下すると、カヌーの中に腰をすっぽり入れて座れるような形状になる。

さらに両資料ともに舳先に加工がある。これは神話からモチーフをとった「カワウソを飲み込む

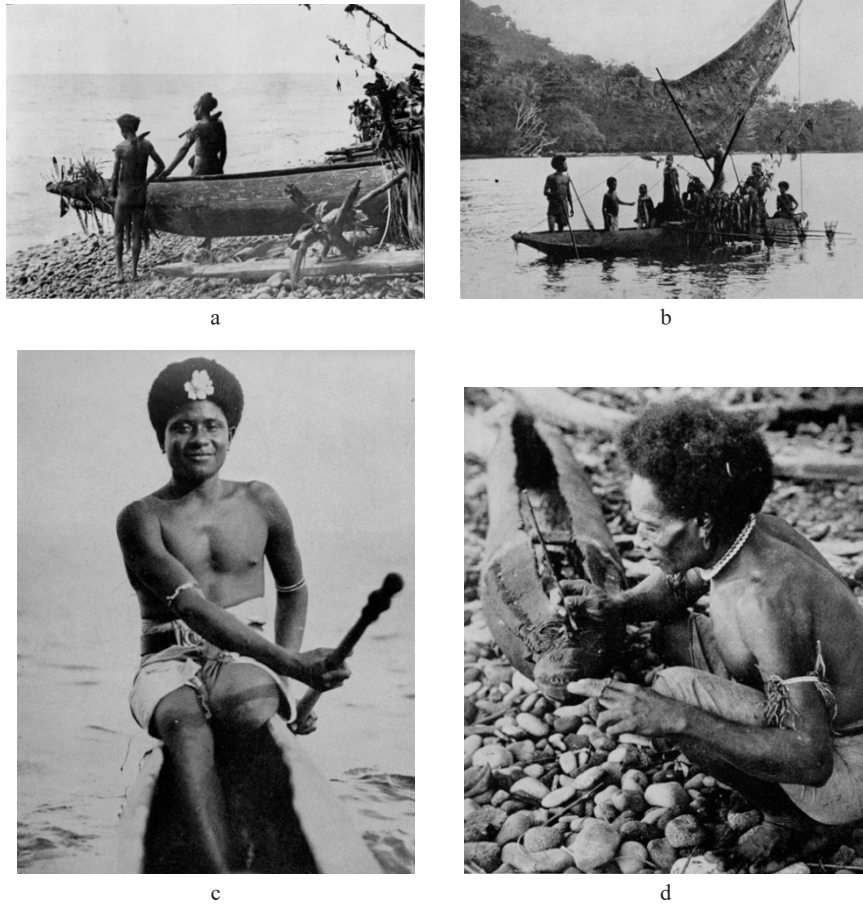


図13-9 ホグピンの報告したショーテン諸島のカヌー (Hogbin 1935)

鰐」であろう (図13-10a & b)。また船体には装飾が施される (図13-11 & 図13-12)。両資料ともに船体中央部を煤で黒い帯状の部分を作り、そこに刻文 (図13-11a) か白色 (石灰) 塗料 (図13-12a) で図像を描いている。そしてその前後の部分には刻文でメアンダーのような装飾がなされる (図13-11b & 図13-12b)。この種の文様は他の物質文化にも適応される地域の特徴である。

造形が完成させられ船体の横にデザインが施される。これが行われる前に呪術が施される。造形は専門家によって造られ、船体に浅いレリーフを施すときは専門家の指導で村人が行う。模様は幾何学的だが、それが象徴しているものによって呼ばれる。この模様の起源を神話では最初の男性が旅に出るとき不貞をはたらかないように妻の体に彫った入れ墨の模様だと語られる (Hogbin 1935)。

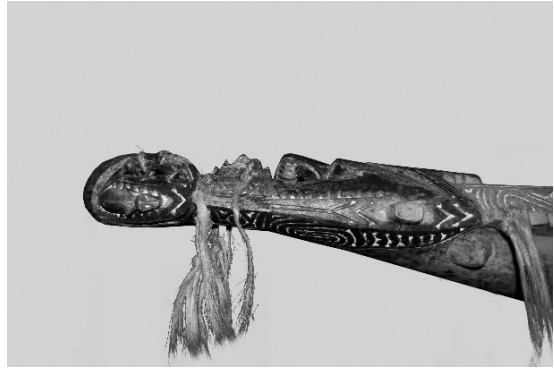
さらにカヌー用パドルの先端も特徴的である。海洋博、南山資料共に、パドルの柄の先端が鰐ないし蛇の頭を思わせる加工がなされている (図13-13a & b)。

パドルの水を掻くブレードの部分も浮き彫りがなされている。海洋博の資料は細長い同心円がX字をなすような加工がなされ (図13-14a)、南山資料には魚と思われる彫刻があり、その胴体には四つ葉状に配された同心円の模様が施されている (図13-14b)。

また南山資料のアカカキは内側に取手のある典型的なオセアニア型である。この内側に曲がった取手も鰐ないし蛇、あるいは亀頭のような彫刻が施されている。また側面には魚と思われるモチーフが浮き彫りされている (図13-15)。



a



b

図13-10 カヌーの舳先彫刻の比較 a: 南山大学; b: 海洋文化館

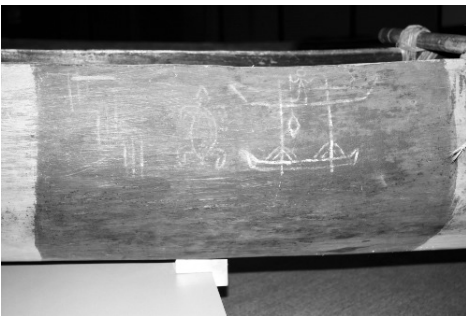


a



b

図13-11 カヌー船体の装飾 (南山大学資料)



a



b

図13-12 カヌー船体の装飾 (海洋文化館資料)



a



b

図13-13 カヌーパドル先端彫刻の比較 a: 南山大学; b: 海洋文化館



a



b

図13-14 ショーテン諸島のカヌーパドル・ブレード部の装飾
(a: 南山大学、b: 海洋文化館)



図13-15 アカカキと取手の装飾 (南山大学)

2) エルミット諸島

パラ・ミクロネシア (Para-Micronesia) とは、ショーテン諸島の北方、アドミラルティ諸島の西方に浮かぶ島々を指す総称である。ドイツ時代には西方諸島 (Westliche Inseln) と総称され、また同時にパラ・ミクロネシアという文化領域名でも呼ばれていた。その名称の由来は、島民の肌や髪の色がミクロネシアに近く、ミクロネシアとメラネシアの混合文化のように思われていたからである (Koch 1969: 133-138)。この地は文化変容が早くから起こり、文献や研究がもっとも少ない地域でもある。物質文化も独特で刀や櫂などにはミクロネシアのキリバスとの類似性も指摘されているが、カヌーの形態、多数のX字型のペグで浮き木用の腕木を、下交差式に固定する方法などは周辺のメラネシア、マヌスやビスマルク、また南に浮かぶショーテン諸島により近いものと思われる。

エルミット諸島から収集された首長の使用する交易用のカヌーは圧巻である (図13-16a & b)。これはパーキンソンが報告しているカヌーの実物で、ベルリンの民族学博物館に展示されている (Parkinson 1999: Plate 30)。長さ約15mで1本の木を削り貫いた船底に側板を足し、中央が若干ふくらんだV字状をなす断面をもつ航海用のカヌーである。片側に浮き木を4本の腕木で装着する。各腕木は下に湾曲した支え棒をもつ堅固な作りとなっている。全体に隙間なく鍵状の模様が描かれ、見る者を威圧する。

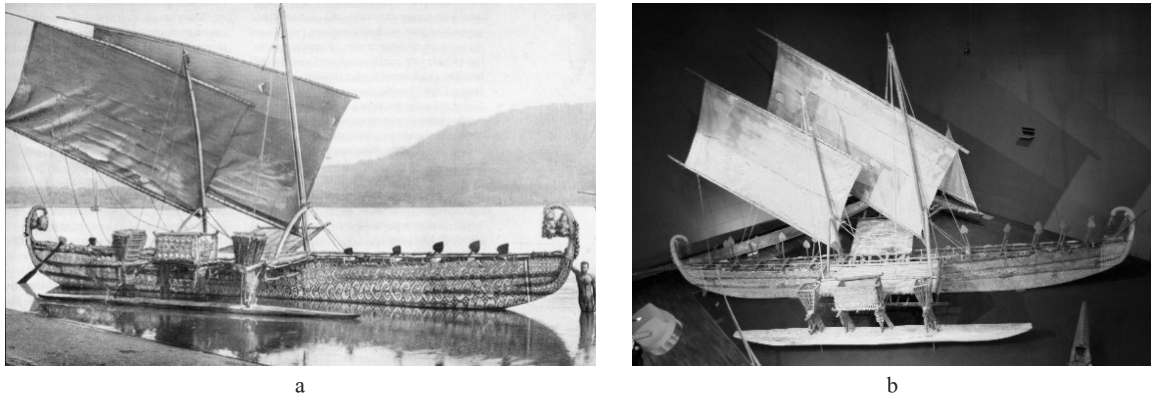


図13-16 ニューギニア・ハーミット諸島のカヌー (a: Parkinson 1999: Plate 30, b: Parkinson によって報告されベルリン民族学博物館に収蔵されている同じカヌー)

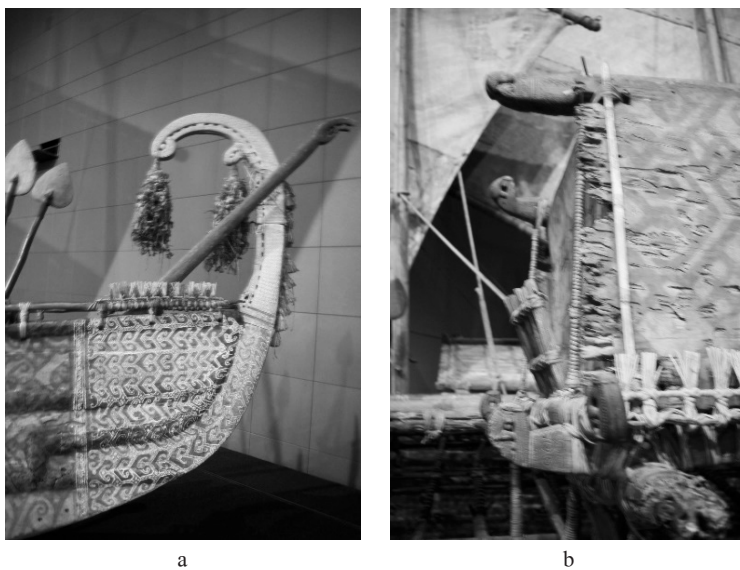


図13-17 ニューギニア・ハーミット諸島のカヌー (ベルリン民族学博物館展示資料)

船首と船尾は同型で航行法はシャンティングであろう。湾曲した舳先は男根をシンボル化したものとも言われるが(ベルリン民族学博物館の解説パンフレット063による)、むしろシダ植物を模し、その生命力をカヌーに込めたのではないかと筆者は推測する(図13-17a)。

太い腕木やアウトリガー側に備えたプラットフォーム上の台を支える棒などはすべてその先端が鱗のない蛇のような加工が施される点がショーテン諸島のカヌーとの類似点である。またこのカヌーの

舳先にあるシダ植物のような螺旋模様は、先端にだけ注目すると他の物質文化、たとえばビンロウを噛むさいに使う石灰簗の柄先端に彫られた装飾を想起させる(図13-17b)。

このカヌーは交易用だが、このような全面装飾あるいは「入れ墨」といった豪華なカヌーに乗って交易相手の島を訪れるときのクルーたちの誇らしげな顔が目に浮かぶ。このような特徴的なカヌーや帆が彼方に見えてきたら、敵ではなく味方が来たことを相手は知るであろうことはクラカヌーの事例からも容易に想像がつく。

この地域西端に位置するマティ(Maty)諸島のカヌーも特徴的である。この地域の住民は肌の色もあまり濃くなく、言語はサモア語に近いという説もある(Haddon 1937: 177)。カヌーの舳先と艫は反り返っているのではなく、むしろきわめて鋭く突き出している。そしてその上部に角のように細く反り返る装飾部を装着している(Haddon 1937: 177)。実物は全体を白く塗られベルリン民族学博物館に展示されているが、筆者はこのカヌーを見た瞬間メカジキの姿を想起した(図13-3)。

3) アドミラルティ諸島・ビスマルク諸島

マヌス島を中心とする島々はアドミラルティ諸島と呼ばれる。この地のカヌーは細身の船体から

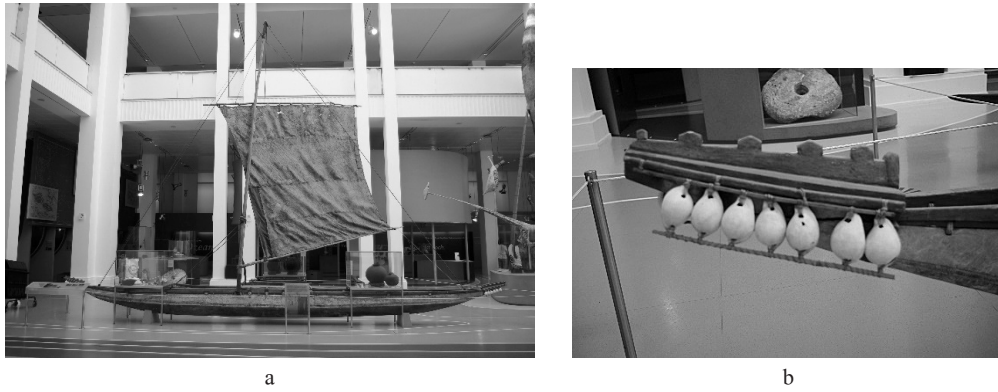


図13-18 アドミラルティ諸島のカヌー a: カヌー全形、b: 船先の装飾
(プレーメン海外博物館展示資料)

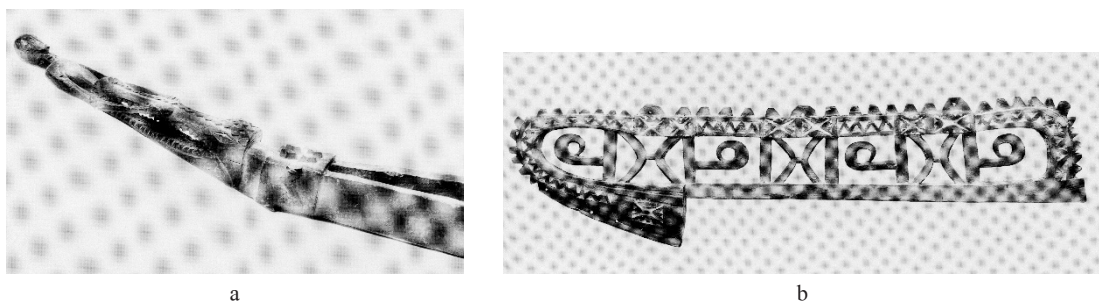


図13-19 アドミラルティ諸島のカヌー船先装飾 (a: Ohnemus 1998: 402, b: Ohnemus 1998: 400)

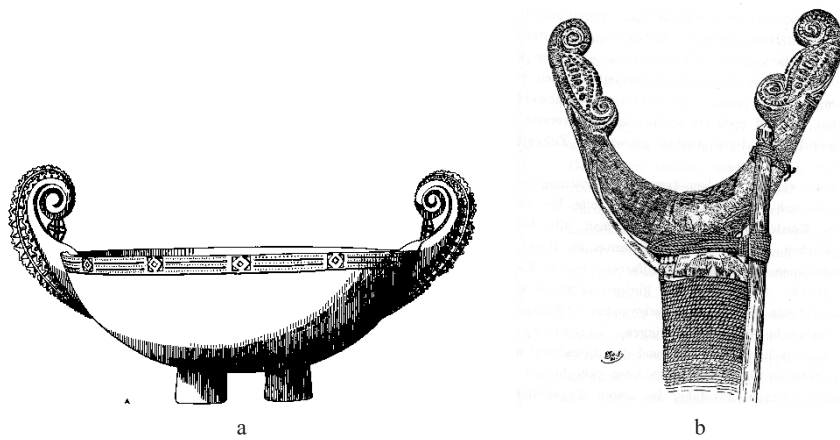


図13-20 アドミラルティ諸島のカヌーと木椀の装飾
a: 木椀 (Badner 1972: Figure 10)、b: マストの先端 (Thilenius 1903: Fig.102)

尖った船先と艫が垂直に伸びる形が主流であり、反り返った形態はしていない (図13-18a)。また船先には鰐が彫られるのが普通であるが、ショーテン諸島のカヌーに比べると、彫りが浅いため角張った船先の全体の形態は保たれている。あるいは尖った船先に白いタカラガイ (ウミウサギ) を並べた装飾も行われる (図13-18b)。別の形ではショーテン諸島のように鰐が人?を飲み込もうとしている意匠もある (図13-19a)。

これらとは別形式の船先飾は板に透かし彫りがなされている。楕円形を帯びた全体は垂直なのであるが、透かし彫りの中に、シダ植物状の螺旋模様が彫ってある (図13-19b)。同様の螺旋模様をアドミラルティの物質文化の中で探すと、木椀の柄がそれにあたる (図13-20a)。アドミラルティの木椀における柄の装飾はこの種の物質文化ではもっとも凝った装飾として著名である (Nevermann

1934: 204)。また水をくむ柄杓の柄の先にも類似の装飾が見いだされる (Thilenius 1903: Fig. 104)。

また帆走用カヌーにつけられるマストの先端に何らかの装飾があることはこの地域では一般的である。アドミラルティのタウイ (Tau) 島では二股に分かれたマストの先端がシダ植物あるいは巻き貝状に装飾が施されている (図13-20b) (Thilenius 1903: Fig. 102)。

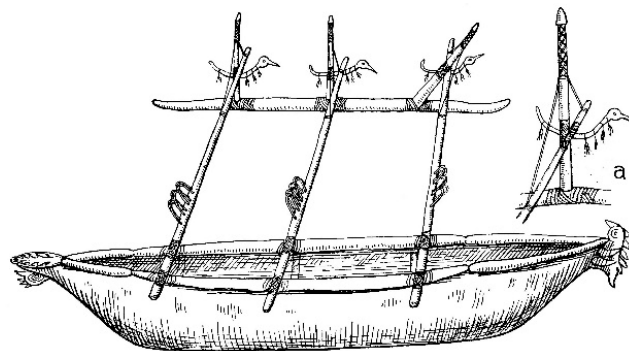
さらに南東に進み、ビスマルク諸島のニューアイルランド島南、ニューブリテン島との間に浮かぶデューク・オブ・ヨーク諸島周辺ではソロモン諸島に特有のモン (mon) 型カヌーが知られている。モン型カヌーとは竜骨の上に数枚の下の側板を複雑に積み上げ、さらにオセアニアでは珍しくアウトリガーを付けない型式のカヌーである。一般にモン型カヌーは沿岸を櫂走するのに使われ、舳先と艫が反り上がっているのが特徴である。特にこの地域のモン型カヌーの特徴は舳先に雄鶏の鶏冠を思わせる飾りが装着される点である。

ニューアイルランド島南西部およびその沖でニューブリテン島の上に浮かぶワトムなどの島々ではアウトリガーの接合が特徴的である。それは二股に分かれた枝をとって腕木にするという工夫である (図13-21a)。また北西海上に浮かぶニュー・ハノーバー島に至るとアウトリガーの腕木と浮き木を結合するペグ (中間材) に鳥型の飾りが装着される。これはさらに北東洋上に展開するエミラ (Emira) 諸島のカヌーでも観察される (図13-21b)。

さらに戦闘用の大型カヌーでは様々な型式の舳先が知られている (図13-22) (Stephen 1907; Meyer 1911)。まず図13-23aのニューブリテン島の東端のガゼル半島を中心に見られる kuku と呼ばれる型式はカブトムシの角を表している。実例は海洋文化館に展示されている (図13-23b)。デューク・オブ・ヨーク諸島周辺やニューアイルランド島の東海岸には雄鶏の鶏冠をモデルとした舳先が見られる (図13-24 a & b)。



a



b

図13-21 ビスマルク諸島の櫂漕用カヌー a: 二股の腕木をもつタイプ (ニューアイルランド島コントゥー村)、b: 鳥の装飾を持つ腕木 (ニューハノーバー島 Haddon 1937: Figure 88)

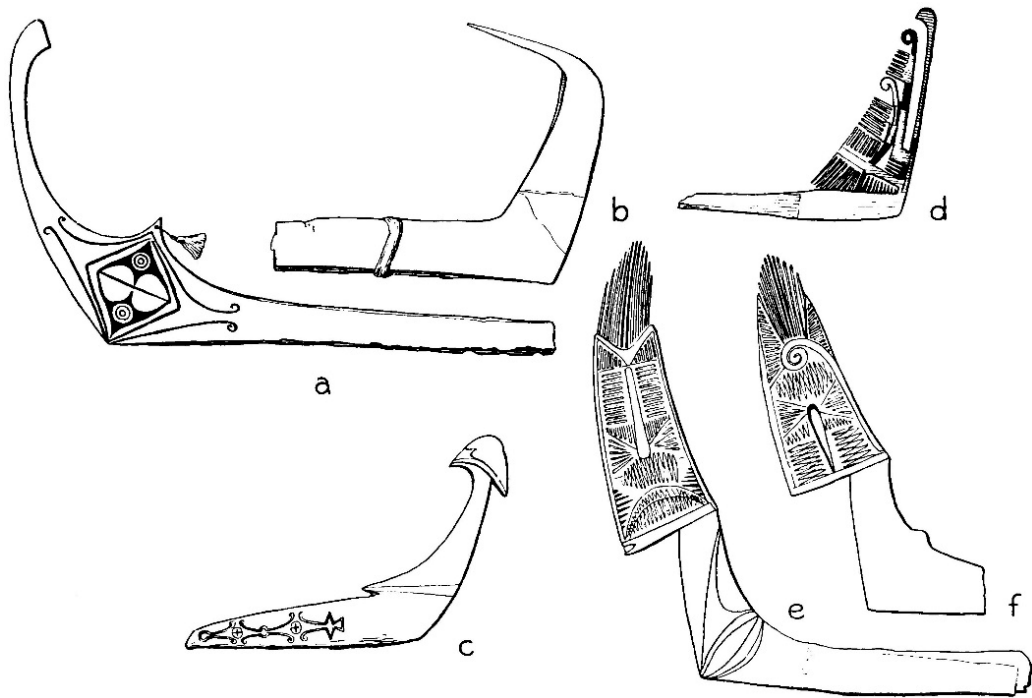


図13-22 ビスマルク諸島の戦闘用カヌーの舳先の装飾 (Haddon 1937: Figure 80)

Ernst Stephan, Südseekunst. Tafel VII.

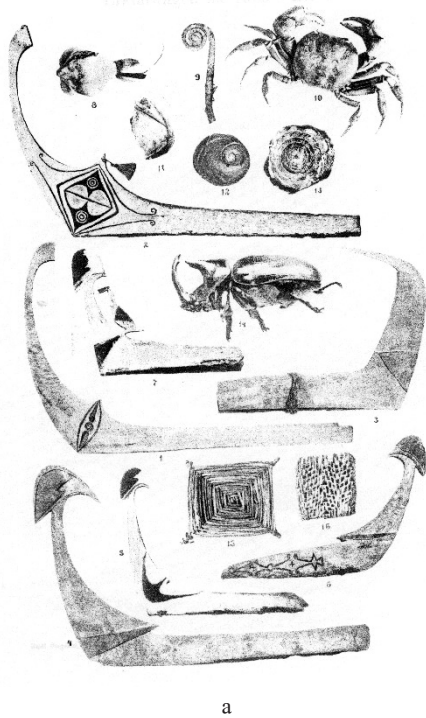
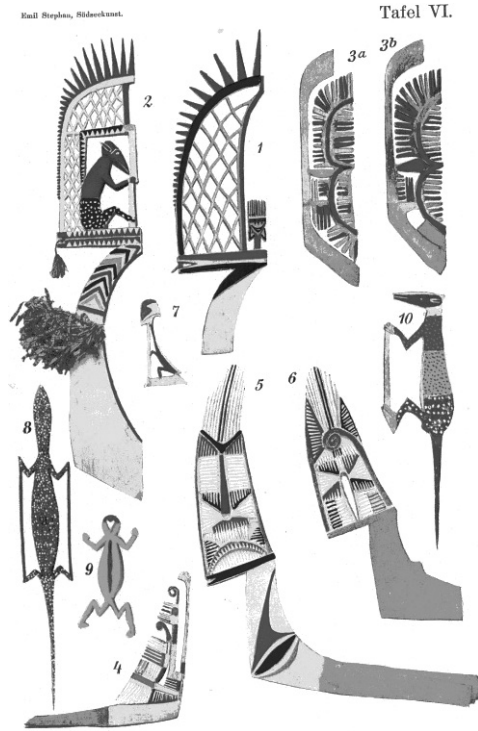


図13-23 カプト虫角型舳先 a: 舳先とそのモデルとなる動物 (Stephen 1907: Tafel VII)、
b: ビスマルク諸島・ワトム島採集のカヌー (海洋文化館収蔵)



a



b

図13-24 ビスマルク諸島の戦闘用カヌーの鶏冠型船先 (a: ハンブルク民族学博物館、
b: Stephen 1907: Tafel VI)